

令和7年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立牧田小学校		NO.			
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価	
学力向上×ICT活用	<p>1 教職員の授業力の向上 (学力調査、みえスタディチェックで検証 市県平均) ・学習指導要領、学力調査等の結果に基づいた授業改善を進める。 ・個別最適な学びと協働的な学びを実現する複線型授業を推進する。 ・一人一台端末を効果的に活用する。(活用頻度の増加)</p> <p>2 読書活動の活性化(アンケートで検証 貸出冊数増加) ・教職員やボランティアによる読み聞かせの充実を図る。 ・各教科等の授業での学校図書館の活用を図る。</p> <p>3 基礎学力定着取組の推進 ・よむYOMUワークシート、学Vivaセットを活用する。 ・効果的な家庭学習を進め、機会を捉えて補充学習を行う。</p> <p>4 日本語指導教育の推進 ・児童に応じたライト教材や補助プリントを作成する。 ・国際教室と在籍学級での学びの連携を進める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全国学力調査全国平均正答率(6年生)との差は国語-1.8、算数-4.0と過去5年で最も縮まった。第1回みえスタディ・チェック県平均正答率(5年生)との差は国語+16.9、算数+17.6でこれまでの最高値となった。依然、条件に基づいて記述することに課題がある。 ・「話し合う活動」を通じて自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づけているかという問いに肯定的回答をした児童の割合が81%と市平均85%、R6の90%を下回っており課題がある。 ・授業でのChromebookの活用頻度について「週3回以上」という回答が4~6年で77%と市平均(76%)と同等だが、1~3年は26%と市平均(48%)R6(55%)を大幅に下回った。 ・一人平均貸出冊数は1/23現在39.6冊と一昨年度年間平均36.4冊をすでに上回り、昨年度年間平均43.8冊も上回る見通しである。市実施の「読書が好きか」についての肯定的回答も72%と市平均(66%)を上回っている。市の目標50冊には届きそうにないこと、読本本のジャンルの偏りが課題である。 ・板書に仮名をふったり、分かりやすい問いを心がけることで、学習への理解が深まった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業形態を工夫したり、一人一台端末を活用したりして、授業の中で自分の考えを述べる機会を増やしていく。 ・先進校視察等を通して、授業研修を深めていく。 ・各種ワークシートや一人一台端末搭載の復習問題に家庭学習も含めて日常的に取り組ませ、基礎基本の定着を図る。 ・引き続き、支援員を効果的に配置することにより、一人ひとりに寄り添い、個に応じた支援を継続する。 ・学校図書館の利活用を促進するとともに、読書の楽しさや効用が伝わるように日常の読書活動を工夫する。 ・「分かりやすい指示、言葉づかい」「ルビをふる」等、市が作成した「にほんごUP5」に基づいた授業を推進し、外国籍児童や学力に課題のある児童にとって「分かりやすい授業」を心がける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学力向上に向けて担任が児童一人ひとりの学習状況を把握する必要がある。学力調査やみえスタの平均点を確認するだけでなく、担任が採点することで学力の定着状況を具体的に把握し、授業力の向上を図る必要がある。児童個々への取組の記述が必要である。 ・授業力向上への教職員の取組はどのようになっているのか。 ・外国籍の児童が多い中、スタディチェックの数値が上向き傾向にあるのは地道な反復学習の成果が表れているのだと思う。 ・読書好きなことは素晴らしい。図書室や学級文庫の本が充実していると感じる。ジャンルの偏りは我が子を見てもらうところがあるので、授業の中で読んだことのない本をあえて手に取るような仕組みがあるといい。他ジャンルを読むような指導が必要である。 ・時代に合った物語、歴史本を多く並べてほしい。漫画本から読書に誘導すると興味が変わる。 ・自身の子どもを見ていても読書に力を入れているのはよく分かる。子どもも何冊読んだとか言っているので一定の効果は感じている。 	
長期欠席対策	<p>1 不登校をうまない取組の推進(長欠前年度比減少) ・校内教育支援センターほっとルームの活用を図る。 ・ケース会議や支援会議を適宜開催し、支援方法を共有する。 ・関係機関やSC、SSW、SLSとの連携を図る。 ・未然防止、早期発見、早期対応等、いじめをなくす取組を徹底する。 ・教職員スタッフ全員で全児童を見守るという意識を持つ。 ・スクールタイム抑制や睡眠時間確保の取組を推進し、基本的な生活習慣確立を図る。</p> <p>2 人権教育の充実(児童アンケート) ・多様性を認め合う教育の充実を図る。 ・日常的な人権学習を推進する。 ・人権教育、児童理解に関する研修会を継続的に開催する。 ・牧田万博を軸にした多文化共生教育を日常的に推進する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・12月末現在30日以上欠席者は14人おり、内不登校は8人であった。昨年度の同時期24人(内不登校12人)に比べ改善している。引き続き、未然防止や初期対応が必要である。 ・校内サポート教室(ほっとルーム)利用対象者7名の内6名がほぼ或いは断続的に登校できている。 ・学校実施の児童アンケート「早寝早起きをしている」についての肯定的回答が69.8%と昨年度(77.7%)より減り、保護者への「子どもは早寝・早起きの習慣が身につけている」の肯定的回答84.6%と比べ開きがある。 ・学校実施の児童アンケート「自分や友だちを大切に、いじめや差別をなくそうとしている」についての肯定的回答が92.1%であった。100%にしていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校未然防止のため、個別最適な学びと協働的な学びの充実を図る。 ・相談しやすい雰囲気づくりに努め、理由がはっきりしない欠席が数日続いた時等の初期対応を丁寧に行っていく。 ・引き続き、家庭やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、外部機関との連携を図るとともに、校内サポート教室(ほっとルーム)の利用やリモート等、個に応じた不登校支援を進める。 ・教職員の人権研修を推進するとともに、いじめや差別をなくす実践的行動をとることにつながる授業改善を行う。 ・基本的な生活習慣の確立に向け、家庭への啓発を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・途切れない児童への関わりが大変ご苦労なことと感じられ授業参観を通して教職員の児童への関わりを素晴らしいと感じてほしい。今後とも大変ではあるが、このような素晴らしい児童への関わりをお願いしたい。 ・不登校が前年に比べ減少しており、取組が成果を上げている。引き続き不登校の児童のケアに取り組みんでいただきたい。 ・私自身小学校は休みがちであった。学校は特に楽しいところではなく先生に怒られるところと感じていたから。今学校に来ていない子も同じように感じていると思う。これからの学校は学校に来なければ何かを体得できない等の生きていく力を教えていくことが重要だと思う。 ・不登校が昨年度に比べ減っているのもほっとルームが上手く稼働しているからだと思う。児童の睡眠時間が減少しつつあるので保護者も一緒になって考えられるようもって啓発するべきだと思う。 ・魅力ある授業づくり、学校づくりとは具体的に何をしているのか。 ・友達を作る方法や人とふれあう方法を自然に教えていただきたい。 	
地域連携	<p>1 学びや安全安心のネットワークの充実 (ボランティア参加延べ人数昨年度比増加) ・にこにこ牧田っ子見守り隊活動を継続する。 ・地域COと連携し、学習ボランティアを積極的に活用する。 ・地域資源としての出前講座を積極的に活用する。</p> <p>2 郷土の偉人前川定五郎翁に関する学習の実施 ・4年生で年間を通して関連する学習を実施する。</p> <p>3 中学校区での幼小中連携の推進 ・校区ノーマディアデーの時期を校区で合わせて実施する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に引き続き、低学年を中心に読み聞かせや音読聞き取り、町探検付き添い等にボランティア参加していただいている。新規ボランティアの増員が課題である。 ・登下校対応の安全安心ボランティアとして、PTAと連携したにこにこ牧田っ子見守り隊の活動が継続されており、児童の事故件数は40件であった。 ・地域の人材を活用した出前講座があまりできなかったため、各学年で計画的な活用を進めていく必要がある。 ・ノーマディアデーについて、校区で合わせて実施したり、保健だより等で啓発したりすることにより意識した取組ができた。 ・市が進める小中一貫教育に向け、創徳中学校区内小中学校での共通実践が不十分であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の生き方や考え方にふれられるような出前講座の活用を推進する。 ・地域コーディネーターと連携を図り、学年たより等で単発的なボランティアを募っていく。 ・「できる人が、できるときに、できることを」を基本にした「にこにこ牧田っ子見守り隊」の活動を継続する。 ・校区でのノーマディアデーの取組を継続するとともに、市が進める小中一貫教育推進に向け、校区内小中学校間の教職員による授業参観やICT活用等の共通取組を取り入れていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の地域への関わりを促す取組、地域の皆さんが学校並びに児童への安心安全の取組など様々あるが、「できる人が、できるときに、できることを」をモットーに牧田っ子見守り隊の継続を望む。 ・フルタイムで夫婦共働きの時代に人手が足りない現状の中、「できる人ができるときにできることを」は破綻していないか。 ・町探検は地域のことを学ぶよい機会であり、安全面に注意しながら継続していただきたい。 ・ノーマディアデーの時はPCの持ち帰りをやめて本を借りて持ち帰ってはどうか。 ・ボランティアボランティアと言いが、言っている大人が知らない人に挨拶するなど言っている。新しいボランティアが来て挨拶しない、無視することも見て、嫌な思いをすることがあると思う。私自身もそう。ボランティアの人には(見守り隊)、はた当然のように一定の場所に居てもらおう方がお互いに良いと感じる。 ・ボランティア活動の機会を増やし社会とふれあう場所を作る。 ・実子のクラスにもボランティアに入れるように力を入れるべき。 	
非認知能力育成	<p>1 非認知能力の育成を意識した授業実践 (アンケートで検証 否定的回答市平均未満) ・指導案に関連を記述し、指導の意識化を図る。 ・育成を意識した人権教育カリキュラム等各種計画を組む。</p> <p>2 意味づけを明確にした各種行事の実施 ・目的を明確にした特別活動を実施する。</p> <p>3 学習面・生活面での規律の徹底 ・話し方、聞き方名人、MAKITA7の状況を継続的に把握する。(学期ごとに把握)</p> <p>4 出前講座の実施(講座実施回数) ・未来応援人事業等積極的に活用する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・市実施のアンケートにおいて、非認知能力についての否定的回答割合(0内はR6)が「やりぬく力」9.6(9.2)「自制心」9.04(9.2)「自己肯定感」6.21(10.34)「社会性」2.26(0.57)と概ね良好な結果であった。 ・MAKITA7について肯定的回答割合が8割を切る項目もあるため、継続的な指導が必要である。 ・市実施の「地域の行事に参加しているか」というアンケートについての肯定的回答割合はおよそ7割であった。 ・近隣の方々を講師として招いた出前講座を数講座実施できたが、未来人応援事業を実施することができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の生き方や考え方にふれられるような出前講座の活用を推進する。 ・日々の授業や学校行事で、「自己肯定感の涵養」等、つけたい力を明確にした実践を行う。 ・傾聴する姿勢を心がけ、子どもが相談しやすい雰囲気づくりに努める。 ・生活規律について、主体的に意識するように、見届けていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一口に定義できるものではなく、やり抜く力や目標に向かってがんばる力、自制・自律性、自己肯定感、コミュニケーション能力、論理的な思考力等の育成への取組は一朝一夕に進むものではない、継続した地道な取組をお願いしたい。 ・「自己肯定感の涵養」は様々な面でプラスになると思うので指導する教員側の負担も増えると思うが粘り強く取り組んでいただきたい。 ・人と人が助け合うことの大切さを地域社会との交流で学んでほしい。 ・授業中に立ち回り遊んでいる子どもを叱ることでできない教育現場が既に間違っていると感じる。注意できない人にこのカテゴリーを教育できるのかは疑問である。 ・地域の行事はある地区とない地区があるため、数字を上げるのは難しいのではないかと、地域で活躍している人を招き、どんな事でもいので語ってもらい、ふれあう機会を増やせられないか? 	
特別支援教育	<p>1 発達課題に沿った適切な対応 ・ケース会議や支援会議を適宜開催し、支援方法を共有する。 ・すずこファイルの内容を関係職員全員が把握する。 ・子ども理解にかかわる研修会を実施する。</p> <p>2 特別支援学級における授業改善 ・支援会議やケース会議を随時開催し、支援方策を共有し、組織的に推進する。 ・指導主事を要請した特別支援学級の研究授業を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・適宜ケース会議や支援会議を開催して支援方法を共有し、何人かについて医療や福祉等の関係機関とつながることができた。まだ、つなげられていなかったり、つなげても改善が見られなかったりする事例が散見されることが課題である。 ・学級の子ども様子について継続的に全校職員で共有し、対応方法について研修することができた。今後は専門家を招いた研修を進めていく必要がある。 ・今年度から設置された加佐登小学校通級指導教員による巡回通級指導に11名つながることができた。有効な指導方法の共有が課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係機関や専門家を交えたケース会議や支援会議を適宜行い、関係機関や専門家と家庭がつながるように粘り強く取り組んでいく。 ・情報共有シート等を活用し、発達に課題のある子どもの様子や関わり方について全校教職員で共有し、生徒指導体制を幅広く構築する。 ・発達に課題のある子どもに係る様々な事案について、先行事例の知見を得られるような研修を推進していく。 ・通級指導教室担当教員による指導方法等に係る研修会を開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、医療や福祉といった関係機関との連携を密にして根気強く取り組んでいただきたい。 ・指導員の先生を増員してもらったことで教室の様子がだいぶ落ち着いたように感じた。対象のクラスには引き続き入ってもらい、他の子への影響が大きくなりたくないにしていきたいと感じた。 ・発達に課題のある児童が多いため、牧田小専属の指導員を派遣してもらえないか、教育委員会と話し合いしてもらいたい。すずこファイルを大いに活用し支援のめがけないよう教員で周知を徹底してもらいたい。 ・古き良き時代のように各家庭のことを話せる機会を持ってほしい。 ・特別支援の子どもを無理に普通学級に入れるのはどうかと感じる。子どもの親が～ではなく、市や学校の判断で学力によってクラス分け等を行ってほしい。 	
教職員の働き方	<p>1 働きやすい職場環境づくり (月平均時間外在校27時間以下かつ45時間以上延べ人数昨年度比減少) ・会議終了時刻を設定するとともに会議の効率化を図る。 ・毎月2回定時退校日を設定する。 ・SSSの活用による校務の平準化を図る。</p> <p>2 服務規律の徹底 ・忌憚のない意見を言い合える風通しの良い職場づくりを進める。 ・自分事として捉えられる服務規律に関する研修会を実施する。 ・服務規律に関する管理職による声掛けを継続的に実施する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・12月末現在で月平均時間外在校時間は25.39時間(R6:29.2時間)、45時間以上延べ人数は37人(R6:49人)で大幅な減少が見られた。意識改革や雰囲気づくり、国により定められた標準授業時数以上の授業時数についての削減に効果が見られたと思う。長時間在職職員の偏りが課題である。 ・月2回設定している定時退校日の定時退校達成率は約93.8%、60分以内の会議終了達成率は約79.3%で、昨年度よりは改善しているが、引き続き課題である。 ・服務規律に関する研修会や声掛けを継続的に実施し、違反事案は発生していない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の勤務における退勤時間の見直しをもって、時間外在校時間の短縮に係る意識を高める。 ・全体会議の必要性を吟味するとともに、全体会議前の三部会や企画委員会が協議内容を精選する。 ・服務規律の徹底については、職員一人ひとりが自分事として考えられるよう、実際に起こった事案等を基に継続的に研修を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の仕事量は、削減されるどころか益々増加する傾向にある中、空しさが感じられる。教職員が自主的に行うことには制限があり、学校評価に入れる項目としては再考された方がよい。文部科学省や教育委員会が率先して考えることである。 ・健全育成には教職員の健康が不可欠。ワークライフバランスの実現に係る取組を進めてほしい。引き続き教職員の負担が少しも減り、働きやすくなればよいと思う。勤務時間内に終わるように今一度仕事内容を見直す場を設けると良い。 ・点数制ではない温かみのある人を育てられる先生を育成してほしい。 ・教員のストレスが心配である。教員志望数も低下しているようなので、カウンセラー等何らかの対応が必要だと考える。 	